

## 北の小麦の強害草

# ヒゲガヤ

石狩農業改良普及センター

平田めぐみ

農研機構 東北農業研究センター

浅井 元朗

### 分布と生態

ヒゲガヤ (*Cynosurus echinatus*) は地中海地域原産の一年生イネ科雑草で、農業雑草としては2002年に青森県の小麦圃場で初めて報告されている。北海道では2008年頃から道央部の秋まき小麦圃場の難防除雑草として局所的に問題となっている。

秋に出芽した株の多くが越冬する。幼植物は小麦とよく似るが、葉身、葉鞘とも無毛であり、葉耳は無く、葉身の先は少し内側に曲がるのが特徴である。融雪後に旺盛に分げつ・伸長する。圃場周辺に生育する個体の草丈は出穂時においても20～30cmだが、小麦圃場など施肥条件では小麦の草丈を越え1m程度まで伸長する。小麦と同時期の6～7月に出穂～登熟し、長さ2～5cmの円錐形の穂をつけ、長い芒が目立つ(図-1)。土中での種子の寿命は不明だが、少なくとも2～3年は発芽力を有することが現地事例から示唆されている。

### 雑草としての情報

2013年に石狩管内で行った収量調査によれば、ヒゲガヤ多発圃場の小麦収量は少発生圃場の4割以下で、節上歩留や千粒重も減少した。ヒゲガヤ密度の高い圃場では小麦を巻き込んで倒伏する被害もある。

圃場周辺や取付道路に少し生えていた程度が、小麦連作圃場への侵入翌年には圃場内で爆発的に繁茂する事例が認められる。多発生圃場では小麦収穫時にヒゲガヤ種子も大量に圃場に拡散される。堆肥投入歴のない圃場でも発生しており、小麦収穫や麦稈搬出等の機械作業に伴う種子の伝搬が推察される。

一方、春まき小麦圃場では春に出芽したヒゲガヤは収穫時期までに登熟に至らず、実害に至らない。

### 防除に関する情報

2012年にヒゲガヤが多発生した圃場において、秋まき小麦播種後のイネ科雑草に対する有効成分を含む土壌処理除草剤3剤の効果について比較検討したところ、いずれの剤も防除効果は不十分であった。秋まき小麦に対して春以降にイネ科雑草対象に使用できる除草剤はないため、現状では決定的



図-1 秋播き小麦圃場に群生したヒゲガヤ (6月末撮影)



図-2 落ち穂から発芽したヒゲガヤ。葉身の先がやや内曲する (9月中旬撮影)

な防除法はない。秋に出芽した越冬個体をいかに少なく抑えるかが防除対策の鍵となる。

ヒゲガヤの被害を確認した地域に対しては、侵入圃場の管理について、以下の注意喚起を行っている。

- ・3年以下の年数での小麦の再作付はリスクが高いため、連作を避け、イネ科雑草の生育期処理剤が使用できる作物と輪作する。
- ・既発生圃場では小麦収穫後に深耕せず、地表面付近での種子の発芽、消耗を促す。
- ・発生圃場では小麦収穫後の8月中旬から9月にかけて、圃場に拡散したヒゲガヤ残渣から穂発芽が見られる(図-2)。小麦播種後に再生しないよう、ある程度生えそろった時点でグリホサート剤を処理し密度低減を図る。
- ・コンバインや麦稈収集のロールベア等作業機械による種子伝搬についても十分注意する。